

町中大騒ぎ（諏訪峠）

バードは優しい気持ちになって、松原という村の長い一本道を馬に揺られていた。と、そのとき、男がバードの乗った馬の前に飛び出してきて、大声で叫んだ



「おい、おめえ馬っこにのってるけど、蝦夷の女でねが？こんなめんごいかめんごくねえかわからないツラをして。蝦夷の女はどんなもんだが、触ってやるべー」

男が馬に乗ったバードの足に触ろうとして手を伸ばしてきた。その手をイトーが振り払い、そのまま羽交い絞めにした。

「お前、何をしてるんだ。このお方はイギリス国の偉いご婦人だ。蝦夷なんか間違えて変なことをしたら、打ち首になるぞ！」

男は、目を白黒させてあやまった。

「イギリス？それはわがんねがった。勘弁な、勘弁してくれ」

そう言うと、力を弱めたイトーの手を振りほどくと、そそくさと逃げ去った。

「イトー、何だっていうの？」

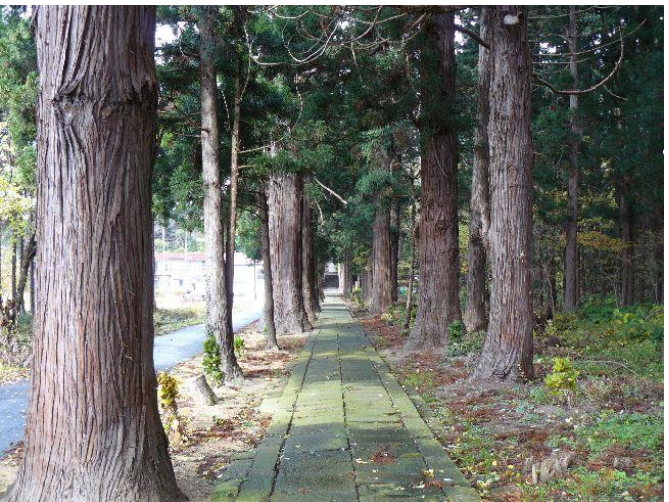
「バードさんをアイヌと勘違いして、寄ってきたんです。とんでもない野郎だ」

「アイヌ？まだこの辺りに住んでるの？ずいぶん前に、北海道にしかいなくなったのではないの？」

「それはちよつと分かりません。ただ、このあたりの人は外国人を見たことがないので、日本人らしくない姿を見ると、昔このあたりにも住んでいたアイヌと誤ってしまうのかもしれませんが」

「私、中国人と間違われたことはあるけど、アイヌに間違われるのは初めてよ。アイヌってどんな顔をしているんでしょう。北海道に行くのが楽しみですわ」

一行は13峠の最後の峠、諏訪峠を越えていく。峠と言っても、距離はロキロキ口足らず、標高差も50メートルほどしかない。道は、よく整備されていてバードに乗せた馬もサクサクと歩いていく。このあたりで最も古い神社、諏訪神社の前を越えた。



諏訪神社は、やはり昔の越後街道を通過して越後からこの地にやってきた。バードたちが通る1000年以上も昔からここに建ち、100メートル続くまっすぐな道と、その両側に植えられた杉の大木は、歴史の古さを物語っている。

バードは、諏訪神社の門前町である小松に入った。最初にバードを見かけた男が、いきなりに向かって駆け出した。一軒の家に飛びんで叫んだ。

「早く！外人が来てるぞ！」

すると、仕事をしていた大工が3人飛び出してきて、外国人来たるのニュースを大声で叫びながら町中を走り回った。

おかげで、バード達が宿屋「西永十」に着く頃には、町中の人がついてきていた。屋敷の中は広がった。庭を流れる川にかかる橋をわたって奥に着くと、二間続きの大きな部屋があった。庭に面した障子戸は開け放してある。大きな池には色鯉がゆったりと泳いでおり、五重の塔や、立派な盆栽、石灯籠が建っていた。

これは大名の部屋だった。柱や天井は黒檀に金泥をあしらい、畳はとても立派、床の間はピカピカに磨きあげられており、象嵌細工の書机や刀掛けが飾ってあった。

この宿は、たった一点をのぞいては申し分なかった。部屋に面した庭の向うには塀を隔てて民家が建っている。その民家の屋根の上に、ついてきた野次馬がびっしりと座り、こちらを見ているのだ。生まれて一度もみたことのない外国人。ひと目見ようとする野次馬があとを断たない。屋根の上の好奇心の固まりの目という目が、バードの動きを負っていた。

プライバシーゼロ。野次馬は、夜になっても去らなかつた。

